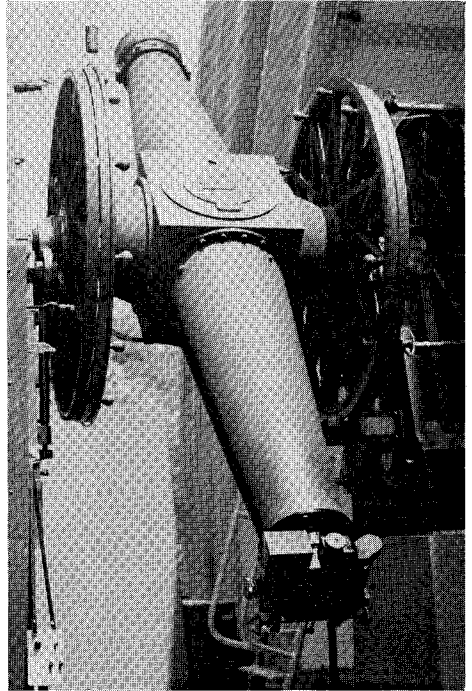


◇ 5月の天文暦 ◇

| 日  | 時  | 記            | 事 |
|----|----|--------------|---|
| 3  | 8  | 土星 合         |   |
| 6  | 0  | 朔            |   |
|    | 8  | 立夏(太陽黄経 45°) |   |
| 8  | 4  | 火星 月の 4°S 通過 |   |
| 9  | 17 | 水星 内合        |   |
| 13 | 11 | 月 最遠         |   |
|    | 19 | 上 弦          |   |
| 21 | 13 | 望            |   |
|    | 21 | 小満(太陽黄経 60°) |   |
| 22 | 0  | 水星 留         |   |
| 25 | 17 | 月 最近         |   |
| 28 | 8  | 下 弦          |   |



20 センチ (8 吋) 子午環

三鷹の東京天文台を見にこられた方は、ほとんど誰でも、この望遠鏡の部屋に案内され、説明を聞かされたことと思う。いわばこの望遠鏡は三鷹の名物であった。参観用の望遠鏡だなどと悪口をいう者もいた。とんでもない。この子午環は、安田春雄博士の指導の下で、子午線部の各氏の協力により、ここ 10 年ほどの間に、有効な幾多の整備・改良がなされ、全く見違えるようになった。国際天文学連合の要望に答えて、1963 年から 5 年計画で始められた、南天標準星 (SRS) (赤緯帯  $-10^{\circ} \sim -30^{\circ}$ 、星数 3560 個) および “Bright” stars (724 個) の観測はすでに完了し、その成果は位置天文学に 1 つの大きな貢献をするものと期待されている。

このフランス製ゴーチエ子午環は明治 37 年 (1904) に 19,138円586 で購入されたという記録がある。当時天文台は麻布飯倉にあった。新調子午環が本格的に使用されるようになったのは、いろいろな事情により、大正 12 年 (1923) の関東震災により促進された天文台の三鷹移転の後、大正 15 年 (1926) の万国経度測量の一環として行なわれた「時」の観測においてであった。これは私が天文台に勤めるようになった前の年のことである。昭和 6 年 (1931)、小惑星 Eros の衝の時期には、早乙女台長の指示に従い、鎌木政岐博士と私とで Eros の赤緯観測に使用された。鎌木博士の天文学教室への転出後は、私ひとりがこの望遠鏡のおもり役となった。昭和 37 年 (1962) 私が天文台を退職するときの思い出は、赤緯観測技術の細々したことを勉強する際の苦心であった。恩師橋元昌

突先生に何も彼も教わるべきであったということであった。

かまぼこ型の観測室はハンプルグ天文台にその範をとったもので、“Saal” refraction 除去が目的であったと思う。観測室のひろさ、コンクリートの諸機械台の大きさ等と、子午環の寸法とは十分にはマッチせず、この為本来の付属装置が使用できず、子午環を三鷹に据えつけ、経度測量開始までの橋元先生の御苦労は並々ならぬものであったと聞いている。また、経度測量期間中、朝夕 2 回ずつ行なわれた子午環観測は橋元先生おひとりだけでこれに当られ、加藤平蔵、大宅取、中村富蔵の諸氏が先生を援助したわけであった。

三鷹の子午環は、今後にグリニッチ、ワシントン、ケープ等の一流子午環に互して、活躍することが期待される。

生みの親を寺尾寿台長とすれば、橋元先生は第一のそだての親である。現在のそだて親、安田博士の手によって、三鷹の子午環は、はじめて、のびのびとその本領を發揮しているといえよう。誠によるこぼしいことである。(中野 三郎)

